

エピソード 彼女に捧げる愛情の証、芽生える幸福

日が変わるギリギリの時間に、瑠瀬の自宅前に立っている。家に呼ばれたのは、今回が初めてだ。

手の震えが止まらない。これは、会いたくて会いたくて震えているわけではない。これからのことを想像して震えているのだ。

初めて招待してもらった意味、そして今の時間。これらを考えれば、何が起きるかは明らか。

スマホが十二時を知らせる——日付が変わった。

これまでの恋愛生活で培った勇気を振り絞って、インターホンを鳴らす。

扉が開き、瑠瀬がやってきた。そのまま玄関に案内される。そこに置いてあった卓上カレンダーを見ると、今日の日付に記念日を示す大きな赤丸が入れられていた。友達をやめた日から一年が経った記念だ。

緊張で固くなった足を動かし、導かれるまま瑠瀬の部屋に向かう。その途中、ただどしい口調で、香子さんについて尋ねてみる。

「……母さんは、新作の打ち合わせがあるって出て行っただわ。しばらくは出版社さんのところから帰ってこないんじゃないかしら」

その話が嘘か本当かわからないが、ここにいないのは確からしい。ということは、この家にいるのは、僕と彼女だけ。

二人きり——それを噛みしめる間もなく、目的の場所に着いてしまう。

室内は、淡いオレンジで照らされていた。その色はどことなくいやらしさを持っていて、今からの行為がより現実味を帯びてくる。

どう始めればいいんだろう。この気持ちをどう表現すれば。思うように言葉を紡がない。

「大丈夫。何を言いたいのか、わかってるから……まずは座りましょ」

肝心なときに臆病になってしまった僕は、溜瀬の操り人形になって、促されるままベッドに腰を下ろす。

明かりは少ししか灯っていないのに、見慣れた顔は鮮明に映る。かつてないほどに

朱く染まっていた。

緊張や羞恥、期待に潤んだ瞳。それを目にするだけで、思考はとろんと溶け、もう彼女のことしか考えられなくなる。ずっと眺めて、脳内に幸せ成分を充満させたい。

だが、それ以上のことができずにいる。この先の展開を想像できて、それを望んでいるにもかかわらず、唇が動かない。

唇——瑠瀬の花唇に、頭をおかしくされていた。ぷっくり膨らんだ唇の柔らかさはどんなものなのか。恋人とのキスは、どれほど気持ちいいんだろう。

付き合い始めてから今まで、ずっとお預けにされているキスがほしくてたまらなくなる。

もう我慢できなくなってきた……引っかかっていた言葉をようやく口にできた。今回こそ、恋人行為を堪能できるはず。

少し間が開いて——

「……ん」

ふわりとした髪の手が鼻腔に触れ、口内に蜂蜜よりも甘い味が広がり、瑠瀬の中に溶け込んだと錯覚してしまう。

これがキス。脳が理解した途端、急激に体の奥が熱くなってくる。

彼女の味を覚えようとしたところ、幸せなキスはすぐに終わりを告げ――

「どうだった？」

そう言われても、最高としか表現できない。けれども、一瞬だったせいで、不満の方が大きくて……。

「私も気持ちよかった。でも、物足りないんでしょ？」

無言で頷いた。もっとキスしてみたい、いや、キスされたい。

「……うちゅ、ちゅる……はぁ、じゅる……んれろ……」

今度は唇を重ねるだけでなく、舌も入れられた。ディープキスに慌ててしまうが、抵抗せずに舌同士を絡めていく。

大人の接吻の最中、背中に腕が回される。それを真似、包むように抱きしめた。服越しとはいえ女の子らしい丸みを感じられ、自然と撫でるような手つきになってしまう。抱擁が強くなるに伴って、ディープキスも激しくなる。キスだけでこんな淫らな水音がするなんて。そう思うほど、エッチなキスだ。

口内に溜瀬の唾液が押し寄せてきて、ゴクンと音を立てながら飲み下す。喉を通る度

に体が熱くなり、もっと欲しいと脳が命令を送る。抗うことは出来ず、嚙下し続ける。  
「ちゅぷ……じゆる、じゆるり……ちゆるる……」

数十秒にもわたる長いキス。徐々に頭が痺れ、真っ白になっていく。

「れろお、ちゆるり……はあ、ちゅ、んはあ……」

苦しいことを察してくれたみたいで、ディープキスを止めてくれた。呼吸面が辛くても、幸せなことには変わりはない。

溜瀬はどんな気持ちなんだろうと視線をやると……悪の女幹部のような笑みを浮かべていた。直観で、この女性には危ないと悟る。

「もう我慢できなくて……いいよね？」

怖さから制止の声をあげようとしたが、それすら間に合わなかった。

「はむッ——じゆる……ちゆる、じゆるる……んちゅ……」

普通のキスではなく、大人のキスでもない。どちらかといえばディープキスに近いが、そんな生易しいものではなかった。

今回のキスは、男に慣れた娼婦のよう——否、それよりもっとエッチで、オスを餌にしているサキュバスの性技。口内を徹底的に犯し、舌を蹂躪し尽すキスそのもの

だった。

「ちゅぷ……ちゅるり……じゅる……じゅるる……」

常識外れのキスに、僕の意識は溶けていく。尋常じゃない速さで溶かされる。炎天下のアイスクリームのように、とろとろと溶けてしまう。

何も考えられず、考えられるはずがなく、もう淫魔の接吻に流されるだけになって……。

快楽を望む気持ちだが、爆発的に大きくなる。と同時に恐ろしくも思う。なすがままになっていたら、肉体も精神も壊されそう。

ここでおしまいにしようと、頭を前後させ抵抗を試みる。

だが――後頭部に手を回され、動きを制限されてしまう。押さえつけられているのか、体が緩んで力が入らないのかわからないのか、その手はびくともしない。

逃げちゃダメ。もっとあなたで愉しませて。そう言っているような拘束に、絶望を覚えてしまう。

柔道の降参よろしく、何度も背中をタップする。キスだけで、みっともない姿をさらすことになっても構わない。今すぐにでもやめてもらわないと、本当におかしくなっ

てしまう。

敗北宣言をしているにもかかわらず、やめてくれない。キスの檻から解放してくれない。僕を氣遣ってくれるいつもの瑠瀬は、もうどこにもいなかった。

唇經由で何かを送るような、激しすぎるキスが続けている。それは、貯めに貯めた性愛なんだろうが、度が行き過ぎて歪み切っている。

瑠瀬が満足するまで、嵐のキスは止む気がしない。そのときまで、意識を保っているだろうか。

「じゅる……じゅるり……れろ、んぐっ、れろり……ちゅる……」

淫魔のキスはさらに強くなる。舌を抜かれ、歯茎を頬肉、そして歯の裏側一本一本まで、ありとあらゆるところを丁寧に舐め回される。未開発の口内が、ひたすら凌辱されていく。

舌同士が絡まり生み出される唾液、それを次々に嚥下する。僕にできることは、それだけだった。呑み込めなかった唾液は、口の端から滝のようにたらたらと流れる。

「んれろ、ちゅる……むぐっ、んはぁ……じゅるり……」

初めてのキスは天国の歓待だったが、今となっては地獄の拷問だ。

無理——視界が狭くなり、もう飛んでしまう。接吻で窒息死する。光を失った瞳を閉じかけた瞬間。

「んっ……んぐ、ちゅ……んう——ぶはあ……ふう……」

ようやくキスレイプから解放される。唇同士が離れるとき、美しくも淫らな銀の水橋がかかっていた。

口元が自由になってすぐ、砂漠の遭難者が水を欲すように、酸素を求めて荒い呼吸を繰り返す。彼女と同じ空気を吸っていると自覚して、よけいに興奮してしまう。

「……ごめんね。もっとあなたとキスしたくて、どうしても抑えられなくて……。限界そうだったからやめることができたけど……」

快楽で頭が痺れていても、瑠瀬の言葉はなんとか入ってきた。僕とのキスが幸せすぎるあまり、こういうことをしてしまったと言われれば、許すしかない。悪気はなく、愛情からの行為なのだから。それに苦しめられたとはいえ、もう一度その愛を受けたと思うているし。

ようやくキスの余韻が治まってきて、目の焦点も定まってくる。

「その……キスしてる間ずっと見てて……。嫌だった？」

即座に否定すると、上機嫌で話しかけてきた。

「うふふ……あなたの表情、とても愉しませてもらったわ。初めの内は気持ちよさそうにしてたけど、だんだん必死な顔になってきて、最後はもうダメ……キスで殺されちゃうみたいになって……倒れちゃったらこの先愉しめないから、やめるしかないかったけど……」

それを聴いて、ぞわぞわと背筋が粟立ってしまふ。もしも、現代にサキュバスがいたら、彼女がそうに違いない。

「ねえ？ 次は何したい？ どんなことでもしてあげる」

どんなことでも——ドクンと胸が高鳴る。

もう我慢できない、早くあれをしたい。いや、その前に……。男なら誰もが夢見るもの、おっぱいを触ってみたいと口にする。

「え！？ 胸を？ でも……小さいし……」

胸元を隠すようにしながら、羞恥にまみれた声を発した。

大きななんて関係ない。僕はただ、好きな子のおっぱいを触りたいだけ。それに、属性的にも貧乳の方が可愛いし。そう熱弁すると、慎ましい胸を差し出してくれた。

触ってもいいと解釈して、おそろおそろ手を近づけていく。

そして——おっぱいを揉み始める。

軽く膨らんでいるそこは、服越しでもふにふにとしていて心地よい。揉むだけで、圧倒的な幸福が手先から全身に駆け巡る。

癒しや幸せもそうだが、興奮を感じずにはいられない。直で触ればどれだけ柔らかいのか、一体どんな形をしているのか。想像すれば、体がより快楽を求めてしまう。服の上からでは耐えられなくなって、脱いでほしいと口にする。

「脱いでって……う、うん……」

一瞬戸惑ったようだが、おもむろに脱ぎ始めた。その緩慢な動作に、より情欲を煽られる。早く溜瀬のおっぱいが見たいと焦がれるが、一番エロい脱衣の瞬間を焼き付けたい。相反する考えに、頭がどうにかなくなってしまいそう。

とうとう上半身に身に着けているものは、ブラ一枚となった。控えめなのか大胆なのかかわからないが、黒色だった。

下着が胸を主張させている。上部から素肌が覗いていて、黒と肌色の対比がとんでもないほどエッチだ。

ブラに意識を奪われていたが、露わになった脇や鎖骨、喉元も溜瀬の魅力を底上げしている。特に、脇周辺の柔肉に魅了されてしまう。

脇肉へと手を伸ばし、そこからブラの中をまさぐる。

「ッん……なんでそんなとこ……」

予想外の行動に驚いたのか、可愛げのある声をあげた。

「いきなりこんなことするなんてびっくりしたわよ。普通の人はすぐ取るんじゃないの？」

疑問を解消してほしいために、ブラに包まれたおっぱいの良さを語り始める。その後、今の状況を思い出して、恥ずかしさに襲われ……。

「もう、本当に変態なんだから。好きなだけ触ってもいいわよ」

その言葉に、僕の理性は白旗をあげた。

下着の中に指を入れて、締め付けられたおっぱいを揉みまくる。ブラ越しの感触を堪能する。脇肉の柔らかさ、鎖骨のコリッとした気持ちよさ、真っ白な肌を味わい尽

くす。

「あ……やらしい手つきで……ふう……」

快樂で悶える声を聴き、興奮はさらに高まっていく。もっと聴いてみたい、瑠瀬の乱れた姿が見たい。いやらしい感情が次々湧き上がってくる。

もう限界。ホックを外してほしいとお願いする。

既に覚悟を決めていたのか、最後の衣服を取り払ってくれた。

生おっぱいが露わになる――

慎ましいかたちながらも、女の子らしくぷっくりと膨らんでいて、すべすべしていた。そして、ピンと張った乳首が激しく自己主張している。

つきたての餅のようにふんわりしているおっぱいと、可愛らしさといやらしさが混ぜ込まれた乳首に、全神経が支配されてしまう。目をそらすことも余所見もできず、完全に釘付け状態だ。

全身の血液が沸騰し逆流を起こしたような錯覚を覚え、鼻息が荒くなる。どうやっても欲望を抑えきれそうにない。

本能の赴くまま、瑠瀬の美乳を揉みしだく。

「ッ——いきなりそんな……はあ……」

おっぱいから感じる人肌の温もりと甘い匂い、視界に入る美しい胸。そのすべてが、僕の頭をおかしくさせる成分になっている。

気持ちが続いていけば、より強く揉むことになっていき……。

「んう……ああ、ちょっと……そんな強くしたら……」

痛くさせたと反省し、撫でまわすような優しい手つきに変える。

もちろん、乳首への愛撫も忘れない。淡紅色の果実を摘むように、刺激を欲しがって張っている乳首に爪を立てる。コリコリしているのに、プニプニと柔らかい。女性の——おっぱいならではの感触に、惹きつけられてしまう。

「やあ、そこダメっ——ダメだから……乳首ばかり……しないで……」

興奮を高める抗議の声をあげているが、やめるつもりはない。徹底的にいじめられたキスのお返しだと言わんばかりに、おっぱいを、特に膨れ上がった乳首をいじくりまわす。

弾けば、挟めば、擦れば、突つつけば、押し込めば、弄べば弄ぶほど、硬さが増していく。それと共に、股間に悪い嬌声もどんどん大きくなっていく。

「あうう……やめ、お願い……もうダメ……んああ……」

蕩けた表情をしていて、その瞳には涙が溜まっていた。肌も上気していて、全身に汗がにじんでいる。息も絶え絶えで、本当に限界という感じだった。

エロく茹った頭でも、この状況はさすがにまずいと判断でき、指先での攻めを中断する。

「……はあ、はあ……こんなに上手だったなんて……」

いつもの癖から、すぐに謝ると。

「イヤなんて思っていないから大丈夫よ。気持ちよかったのはほんとだし……」

そして、小悪魔らしい声色で、続けて話しかけてくる。

「どうして慣れてるかしら？ 乳首開発でもしてた？」

自分で自分の乳首を責めていた経験を生かして、気持ちよくさせていたのが見透かされていたなんて。

「そういう顔するから、すぐにバレちゃうのよ。初めと何も変わっていないじゃない。一人するのも寂しいでしょ？ いつでも手伝ってあげるわよ」

こんなことを愛する人に言われたら、断れるわけがない。

「ふふっ……まったく、素直なんだから。それで……そっちも素直になってるみたいね」

下腹部を指しながら、そう言葉を紡ぐ。一方的なキスや美乳を揉みしだいていたことで、完全に勃起しきっていた。

「……そんなにしちゃって……今から……する」

溜瀬に聞こえそうなほど、心臓がドクンドクンと音を奏でる。体も心も、最高の快楽を待ち望んでいるのは明らかだ。

「それじゃあ……脱いでくれる？ ううん、私が脱がせてあげる。力抜いて……」

なすがままになっていると、まったく鍛えていない上半身がさらされ、あつという間に大きな TENT を張ったパンツだけにさせられた。

「こんなに膨らませて……この中にあなたの……」

一番大切な部分を見られることになる。少々……いや、ものすごく恥ずかしく、自然と体が強張ってしまう。

「んっ、引っかって……」

わがままなほど自己主張しているせいで、手間取っているらしい。それでも、数秒後には脱がされるもので。

恋人の目の前に、小作りという役割を果たそうとしている生殖器が露わになる。

「これが……ふふっ、可愛い……」

男らしい、カッコイイではなく傷ついてしまう。ただ、そう思われるのも仕方がない。成年にもかかわらず、皮を被ったままなのだから。今から大人の愛を確かめ合うというのに、成熟しきっていないなんて情けない。

「……そんな顔しないで。私は好きよ、あなたの……。でも、これって剥かないといけないのよね？」

もちもちとした手が、僕のものに触れた。ピリッとした刺激に、針を刺されたときのような声を出してしまっ……。

「ごめん、痛かった？」

心配してくれた瑠瀬に、気持ちよかったただだと伝える。

「よかった……このまま続けるからね。こうやって、優しくして……うん……はあ……」

触っているだけでエッチな気分になってきて……早くほしくてたまらなくなっちゃう」余った包皮を剥かれ、真っ赤な亀頭が姿を現す。それからも徐々にズリ下ろされていき、空気に接する面積が増えていく。そうして——エラを張ったカリ首まで露わになった。

聖母のような手つきで、大人の体にくれた。

そのときの快楽は絶大で、全身に強い電気が走ったようだった。敏感な亀頭すべてが露出し、溜瀬に握ってもらえているのだから当然だ。

性知識に詳しくても実物は初めてらしく、僕のをまじまじと見つめている。恥ずかしくてたまらないが、やめてとは言えなくて。

「ほんとにこんな形してるのね。それで……これが尿道口？　なんだかヒクヒクしてる……触ってもいい？　……卒はこんなに硬いの、亀頭ってすごいプニプニしてるのね。……あっ、ごめん、痛かった？」

つんつんと突っつかれる度、頭がピリピリと痺れ、苦しさを感じさせる声が漏れて

しまう。

「やっぱり、このままだと痛いね。すぐ楽にしてあげるから……ちゅっ……」

突然襲い掛かってきた破格外の刺激に、女の子のような嬌声をあげてしまう。

向かい合っていた溜瀬の顔が下がったかと思うと、亀頭の先端に口づけをしていた。「可愛い反応するのね……。その……入れる前に濡らしておかないと……。舐めてあげるから、気持ちよくなったらさっきみたいなの声出して。あなたの可愛い声、いっぱい聴いてみたいの」

また股間に顔を持っていく。

この行為をされているところを妄想して、いつも一人で愉しんでいた。それをされるとわかると、期待で大きく脈打つ。

「はむっ……じゅる……れろお……ちゅるる……」

どんなことをされるのか理解できていたのに、どれほど気持ちいいのかまったくわからなかった。咥えこまれるのがここまで良いなんて知らなくて、腰がビクンと跳ねる。

「ちゅる……れろ、れろり……んはぁ……んれろ……」

ねっとりとした舌が竿全体を伝う。ぬめりや生温かさに慣らしてもらっているよう

な動きだった。

くすぐったい気もするが、お風呂に浸かっているような温もりに、とろんと目を蕩けさせてしまう。

「んふ……どう？　ちゆる……ひもちいい？　ちゅぶ……」

この状態で喋られると、息がかかり、また違う気持ちよさも感じられる。加えて、上目遣いをしながら股間でもぞもぞと動いていれば、それだけで勝手に興奮してしまう。それでも、何分か経つと物足りなくなってしまうて……。

「……んう？　はあ……満足してない顔ね？　いいわ……本気でしてあげる」

どことなく冷たい言い方だった。それに、口端もニタァと広げていて、不吉な予感がする。

生ぬるい責めから一変、今までと比べ物にならないほどおぞましいものに変化した。舐める、しゃぶるといふ表現では収まりきらない。溶かすと呼んだ方が好ましいものだった。

男性上位の行為、女性の奉仕活動ではない。完全に女性上位の行為だと、体中に流れる快感から痛いくらいにわかる。

「じゅる……じゅるり……んれろ……ちゅぷるる……」

口内は唾液で満たされていて、ぬるぬるした涎を纏った舌が触手のようにちろちろうごめく。カリ首に巻き付き、その段差に食い込み、敏感な箇所を狙い撃ちにされる。舌先を固め、亀頭や裏筋を突くような動きにも魅了されてしまう。

「ちゅる……んん……ちゅう……ちゅるり……んちゅ……じゅるり」

頬肉も十二分に使った責めで、キュッと締め上げられ、ただならぬ圧迫感に襲われる。かと思ったら、頬の力を緩められ、生暖かい空気にさらされる。

男なら喘がずにはいられない快楽を送られ、気持ちよさを表す声が漏れ出て止まらない。初めの我慢はあっけなく崩れ、溜瀬の口技に溺れた僕は、可愛いと言っていた情けない声をあげ続ける。

快楽に歪んだ顔のまま、激しく上下する頭部を見ると、目があっってしまう。その表情は、小悪魔よりも淫靡で、僕の痴態に満足しているようだった。

巧みな性技が怖くなり、途切れ途切れになりながらも、どうしてそんなに上手なのかと問いかける。

「じゅるり……んん？　いつも……んじゅる……あなたを……ちゅる……おもいながら……」

んはあ……おもちゃであそんで……」

話すときの息遣いや呼吸音、それさえも快楽に変化し、狂おしい刺激を与えてくる。壊れかけの頭で、なんとか整理していく。一人で愉しむために、男を象ったおもちゃを啜えて舐めしゃぶっていた。それも、僕を想いながら。だから、こういう行為には慣れていゝらしい。

「でも……あなたのためより、んちゆる……おもちゃの方が大きくて……じゆる……ちよつと意外で……ちゆるるる……」

その一言が、胸に深く突き刺さる。作りものの方が立派なんて、雄の価値を全否定されたようなものだ。

やかんが瞬時に沸騰するほどの悔しさが湧き上がる。その屈辱も快楽に変わり、悔しいけど感じてしまうという状況に、どんどん快楽指数が高くなっていく。

そして、射精したい気持ちが強くなる――

このまま出したらどうなるんだろう。えずいたりするのだろうか。ゴクンと音を立てながら、美味しそうに飲んでくれるかな。

生温かい口内粘膜に包まれながら、満足いくまで射精したい。その考えが脳を支配

し、尿道口からとろとろとしたものが溢れだす。

「……んう？　じゆる……はあ……これって我慢汁？　その……射精しなくなったら出るのよね？　もしかして、もう出したい？」

その問いにコクンと頷く。

「ごめんね。ちよつと舐めて終わる予定だったのに、スイッチ入っちゃって……。この言葉を嫌う人がいるのは知ってるけど、出すならこっちにしてほしいの。私……あなたのがほしくて……あなたと赤ちゃんを作りたくて……お願い」

確かに、滾った状態で本番に移るのは苦手だ。だが、今はそんなこと思わない。これは性行為ではなく、子を宿すための生殖行為。

溜瀬に直接注ぎたい。

「……それじゃあ」

ゆっくりとスカートを下ろし始め、純白のショーツが見えてくる。既にぐっしより湿っていて、僕を欲しがっているようだった。

「私ももう我慢できなくて……」

最後の布をずらしていく——初めて目にした瑠瀬のそこは、うっすら茂っていて、透明な液体で濡れそぼっていた。

「一緒に気持ちよくなろ」

耳元で囁かれ、脳内が瑠瀬一色に染まる。瑠瀬とセックスしたい。頭にあるのは、ただそれだけだった。

「きゃっ！」

性愛衝動が限界を超え、押し倒してしまふ。可愛らしい驚き方で、情欲が増幅される。

「……もう、大胆なんだから」

自覚はあるが、我慢できなかったのだ。

女の子を知らないせいで、これからどうすればいいのかわからなくて……そんな僕を見かねて、最愛の彼女がリードしてくれた。導かれるまま、最高の行為の一手手前までたどり着く。

後は、体で愛を感じあうだけだ。

「その……優しくしてね」  
ゆっくりと入れていく。

そして——ヌチャリという卑猥な水音と共に、とうとう繋がった。

「んっ……い、痛ッ——！」

痛みが伴うのは本当のようで、苦悶の声を上げる。結合部から鮮血が流れ、どうしても心配になってしまう。

「ん、大丈夫だから。ちょっと痛かったけど、それ以上にとっても幸せなの。ようやくあなたと繋がれて……」

それを聞いて、これまで生きてきた中で、格別の歓喜と感動が体中を駆け巡る。もちろん、至上の快楽も下腹部から全身に広がっていく。

こんなにも気持ちよくて幸せだが、これはただ入れただけ。今から、本格的な生殖行為を始める。

「動いて……あなたの男らしさを感じてみたいの」

僕が雄だと刻みつけるため、溜瀬自身を突いていく。

一突きするたびに、爆発的な快楽に襲われ、真っ白な火花がパチパチと散る。

入れていくと、歓迎するように肉ヒダが纏わりついてくる。引き抜こうとすると、放さないでと抱き留めるように、肉ビラが追いつがつてきて……。絶対に離れたくない、最後の最後まで愛してと言っているかのように、ヒダ一本一本までもが絡みつく。

「ッ、はぁ……それ、好き……もっと……」

嬌声をあげれば、溜瀬の中がキュッと収縮する。

全身を溶かす灼熱の快楽で、腰の動きが止まってしまいそうになるが、愛を確かめ合うために、強くまた優しく突いていく。

「んう……いい、気持ちいい……ふう……嬉しい……んはぁ……」

密着状態のおかげで、胸元からドクンドクンと激しい鼓動が聞こえてくる。

視線を下にずらすと、天を向くように勃起している乳首があった。その美しさに、また目が奪われ、欲しくてたまらなくなる。

乳首を吸って、甘噛みして……極上のデザートにかぶりつくように味わい尽くす。当然、肉ヒダの愛を感じながら。

「はぁ……急に乳首舐められたら……んんッ……気持ちよすぎて……頭おかしく……もっと、もっとして……」

可愛くエロすぎる声で懇願される。返事の代わりに、より情愛を持って、腰を前後させていく。

締め付けが段々強くなる。気持ちよすぎて、もう身動きが取れなくなりそう。それでも、愛するために抽送運動はやめられない。

「んあぁッ……いい……好き、ずっと好きだったの……んッ——あなたと出会えてよかった……」

その言葉を受け、今までの記憶がよみがえってくる。身バレして、友達になった日。昼食を食べ、下校もした。友達関係が崩れ、ずっと悩んでいたこと。恋人になった瞬間。瑠瀬の過去を理解して、トラウマを打ち明けた初めてのデート。サキユの宮さんとのコミフェ。それから、ずっと一緒に過ごしてきた。

僕も、瑠瀬と出会えてよかった——出会えたからこそ得られた幸せが、数え切れないほどたくさんある。

そして今、二人で最高の幸せを作ろうとしている。

瑠瀬の中で大きく脈打つ。

「射精しそうなの？　お願い、出して……たくさん出して！」

ぐつぐつに煮えたぎった精子が、睾丸の中で暴れまわっている。もうこの想いを抑えきれそうにない。

「……好き、好き！ 大好き……愛してる！ 一緒に……一緒に気持ちよくなる！」

ありったけの愛情を口にしてくれる。

それがトリガーとなって、射精が始まった――

張りつめた亀頭から、勢いよく大量の精液が迸る。尿道口から灼熱の白濁が飛び出し、溜瀬を白く染め上げていく。

「んッ……あ、ああああ――！！！」

腰を揺すりながら子種を注いでいると、艶めかしい声をあげながら彼女の体がビクンと跳ねる。僕たちの想いが、シンクロを引き起こしたようだ。

射精は一瞬では止まらず、何度も何度も愛情の証を打ち付けていく。絶えず脈動を繰り返し、精を吐き出しても、また次の白濁が尿道口から姿を現す。

それが数回も続き、最後に少量の子種が溢れ、ありったけの愛情と精液を捧げた長い射精がようやく終わった。

「……幸せ……とっても幸せ。ありがとう……」

潤んだ瞳の瑠瀬が愛おしく、ギュッと抱きしめる。言葉なんてものはいらない。抱き合うだけで、どんな気持ちでも理解することができる。

今の僕たちは、心も体も一つになっている。世界で一番幸せだ。瑠瀬に注いだ愛情の証で、幸福が芽生える日が待ち遠しい。